新潮

The Shincho Monthly
October 2016
今年112年目の文芸誌

2016.10

宮本輝「野の春」
―『流転の海』第九部・完結篇―
（新連載100枚）

長谷川郁夫「編集者 漱石」
（新連載100枚）

古井由吉「その日暮らし」

多和田葉子「マヤコフスキーリング」

星野智幸「眼魚」

高橋有機子「似非りんご味」
（新潮新人賞受賞第一作）

柳瀬尚紀 訳
「ガリヴァー旅行記（冒頭部）」

加藤典洋
「シン・ゴジラ論（ネタバレ注意）」

明治37年5月5日第三種郵便物認可第113巻第10号 平成28年10月7日発行（毎月7日発行）（9月7日発売）

新連載

編集者 漱石 第一章・正岡子規 長谷川郁夫 113

日本近代文学最初・最高の文学者＝編集者は漱石である！ 新視点で文学史を更新する。

追悼・柳瀬尚紀

柳瀬尚紀氏追悼——夜の言語 吉増剛造 160

ガリヴァー旅行記 冒頭部 ジョナサン・スウィフト 柳瀬尚紀 訳 149

シン・ゴジラ論（ネタバレ注意） 加藤典洋 163

戦後と災後が出会い、ゴジラは更新された。

怪物たちの身分証明——ベルリン・日本文学の旅 千木良悠子 195

異国から考える、「物語る者」の自己同一性（アイデンティティ）。

死者と生きる——被災地の霊体験 第三回・完結 奥野修司 175

死者と生者が紡ぐ物語の旅、ついに最終章へ。

批評の魂 第十回 前田英樹 215

小林秀雄 第三十七回 大澤信亮 227

地上に星座をつくる 第四十五回・火山に登る 石川直樹 242

見えない音、聴こえない絵 第一四四回・バワリーのゴミ星 大竹伸朗 244

新潮

制作のことば 荒川洋治 206

ドイツでの「岡田利規」学会 内野儀 208

銀河鉄道を降りたら 小島ケイタニーラブ 210

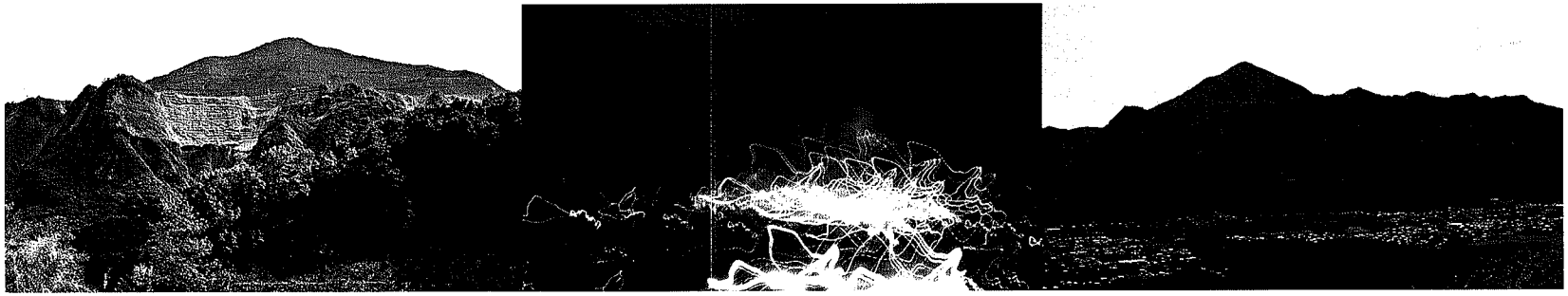
藤田嗣治から妻への手紙——百年の時を経て語りだす声 林洋子 212

本

J・M・クッツェー『イエスの幼子時代』 伊藤聡 246

福永信編『小説の家』 大澤聡 248

崔実『ジニのパズル』 藤沢周 250



誌名＋数字ロゴタイプ／大竹伸朗　写真／笹久保　伸　表紙デザイン／望月玲子（新潮社装幀室）　目次デザイン／山下武夫（クラップス）　本文デザイン協力／中島　浩

第49回《新潮新人賞》応募規定 204

300万部の感動作、ついに刊行

wonder ワンダー

ほるぷ出版
〒101-0064
TEL 03

怪物たちの身分証明

ベルリン・日本文学の旅

千木良悠子

私の名前は千木良悠子という。女性で日本人だ。だがそう言葉にするのには抵抗がある。別に間違ってはいない。近いうちに改名や性別転換をする予定もない。ただ生まれたまんまでボヤッとしていたら、そのようにパスポートに記載される現状にあるだけだ。なのに改めて言葉にすると「あんたにとって女性とは、日本人とは何か」と逆に問い詰められている気になる。自分の性別や国籍を説明するのに苦労を強いられる、数多の人々の存在も頭に浮かんで、鈍感な言葉遣いをしているみたいでイヤになる。自己紹介としては、最も簡潔で分かりやすいはずなのに、ここまで居心地が悪くなるのだから、この言い方はじつは全然「簡潔」でも「分かりやすく」もないのだろう。

二十歳の頃も似たようなことを考えていたのか、こんな文章で始まる「猫殺しマギー」という小説を書いた（産業編集センター、二〇〇三年）。「俺の名前は猫殺しマギー。でも、猫は殺さない。（中略）ものの名前は理由のつけられないものの方が多いから、それでいいんだろうと思う」。マギーというのは一般的には女性の名前らしいが、一人称は意図的に「俺」とした。物語の途中で、マギーはスズランという女と恋人どうしになるのだが、退屈なデートの途中で寄った喫茶

店で、金魚鉢を泳いでいる金魚に恋人もろとも飲み込まれてしまう。マギーとスズランと金魚は三者で合体、鱗の生えた巨大な怪物に変身する。初めは街を粉々に破壊するなど、怪物らしく暴れているのだが、スズランが万能感に恍惚として、怪物と一体化して自意識を失ってしまい、不安になったマギーは最終的に彼女を絞殺してしまう。

男か女か、一人か三人か、人間かどうかすらもあやふやな猫殺しマギー。彼（彼女？）が苦手なのは、喫茶店でメニューを見て注文を決めること。得意なのは自己の感情を押し殺して他人の望む通りの行動をすること。「きみには自分がないのか？」と説教したくなる優柔不断な主人公だが、前もってストーリーを決めないで気の向くままに書いていたら自然にそんな個性が発生してきたのが自分でも面白く、この初めての小説に多少の愛着を持っていた。

そんな「猫殺しマギー」が今年の春、私をベルリンに連れて行ってくれた。ベルリン自由大学日本学科准教授のエレナ・ヤヌリスと、言語論理学研究者のクリストフ・ペーターマンが「マギー」を気に入って、ドイツ語に訳してくれたばかりか、自由大学に私を招聘してくれたのだ。「この小説のテーマの一つに『アイデンティティ』があると思います」と、クリストフは言う。確かにそうかもしれない。名前も性別も国籍も曖昧なマギーだが、金魚に飲み込まれて怪物になっても、人称を「俺たち」という複数形に変換して、平気で物語を語る。彼のアイデンティティはどこにあるのか。

今回のベルリン旅行で、私よりもずっと日本や日本文学に深い関心を抱いている海外の研究者たちと出会った。彼らは「とにかく日本が、日本文学が好き」だと言う。異国文化に幻想を抱いて美化してるんじゃないの、と簡単に片付けられないほどの情熱で、彼らは私の母語を学び、作品研究に勤しんでいる。日本という国とは、つねに心理的に距離を置いてきたのに、「好き」と言われると、まるで自分が愛の告白を受けたみたいに嬉しくなるのはなぜだ。たぶん私と日本は、もう金魚と猫殺しマギーのように合体して見分けがつかなくなっている。怪物同然だ。赤い鱗と尾びれの生えた奇妙な怪物が、水草のように全身に絡みつく自国の歴史や言語を引きずって、濡れた足跡を残しながら、ズルズル歩いている。怪物のアイデンティティはどこにあるのか。もう長いこと日本や自分の内側ばかり見て、けっきょく何も見えなくなっていた私に、ベルリンの人々は外から光を当ててくれた。そして手を取って、かつて壁で東西に分断されていたという、落書きだらけの街の広い空の下に連れ出してくれた。

クリストフ・ペーターマンと出会ったのは、二〇一五年が明けたばかりの正月、まだ深夜のこと。千駄ヶ谷のバーの年越しパーティーに行って、混雑した店内を飲物を片手にうろついていたら、髪を肩まで伸ばした大柄の白人男性が椅子を運んできてくれた。お礼を言うと、驚くほど流暢な日本語で「自分はベルリンから来ていて、日本語を言語論理学的な見地から研究している」と言う。「重複表現ってあるでしょ。『ものものしい』とか『食べても食べても食べきれない』とか。それを四谷の『ドイツ日本研究所』で音声解析して研究してます」。なぜドイツ人が国費で留学してきて、事もあろうに「ものものしい」などという言葉に執心しているのか。

私は劇団を主宰しているのだが、その半年後に三軒茶屋の世田谷パブリックシアターでドイツの映画監督ファスビンダーの戯曲を日本語台本にして演出する予定だった。一つ悩みがあって、公演はファスビンダー演劇の二本立てだったのだが、「猫の首に血」という戯曲の一番ラストの台詞が、何かの哲学書からの引用らしく、難解すぎて意味が分からない。クリストフは興味を示して、後日調べて連絡をくれた。「引用元はヘーゲルの『大論理学』でした。『大論理学』は冗談みたいに難しいことで、ドイツ人にも有名です。その台詞を一度聞いただけで理解できる人はいないでしょう」。何気なく行った年越しパーティーで、私の悩みを瞬時に解いてくれるドイツの人に出会えるなんて、死んだファスビンダーのお慈悲だろうか。

聞けばクリストフはノイズミュージシャンでもあり、その夜DJをしていた作家の中原昌也さんの知人だった。クリストフはもともと中原さんの小説が好きで、先に挙げたエレナ・ヤヌリスが中心となって制作中の、日本文学翻訳アンソロジーに彼の作品を推していた。さらに私の「猫殺しマギー」も読んでくれ、アンソロジーに加えたいと言う。私も以前から知人だった中原昌也さんだが、その時期、会うたびに、「日本なんて息苦しい国は脱出して、ドイツとか外国に移住したい」と切実げにため息をついていた。クリストフに伝えたら、彼はなぜだか喜んで、「一度二人でベルリンに来てみたらいいじゃない？　大学から招聘してもらえる可能性がある」とエレナを紹介してくれた。

クリストフが一時帰国した二〇一五年の秋、入れ替わりにエレナ・ヤヌリスが大学の仕事で日本にやって来た。エレナと中原さんと三人で新宿の焼鳥屋で食事した。十代の頃から、漱石鷗外谷崎川端三島とたくさん読んできたという。川端康成で好きなのは「水晶幻想」や「みづうみ」だと言うあたり、私と好みが似ていた。「伊豆の踊子」や「雪国」から日本の美を描く作家として川端康成を知る人は多くても、「水晶幻想」の儚い文章世界に惹かれたことがあり、その真髄は「意識の流れ」の手法を用いた初期作品にあって、偉大な前衛作家と言えるんじゃないか、なんて会話で盛り上がれる希少な相手にやっと巡り会えたと思ったら、それは青い瞳の麗しのドイツ人女性だった。エレナは現代日本人作家の本も、私の知らない若手まで軒並み読んでいた。こんな極東の国の使う人も限られた言語で文章を書いても無意味じゃないかと疑っていたのは、大きな間違いだった。どこで何語で書いても、読む人は手当り次第に読むのだ。帰国間際、原宿に一緒に買物に行って、歩き疲れて入ったカフェで、私が「もう長いこと気に入った小説が書けてない」と愚痴を零した

ら、エレナは「私があなたの創作のお守りになる。日本にも招き猫みたいなラッキーチャームがあるでしょ？　だから書いてください」と洒落たことを言って片目をつむった。

エレナの尽力で、自由大学内でのスピーチと「マギー」の朗読を条件に大学から渡航費と滞在費が出て、招聘してもらえることになった。翌二〇一六年四月の下旬、アブダビ経由の格安チケットで、中原さんとベルリン行きの飛行機に乗り込んだ。

テーゲル空港に、エレナとクリストフとそのガールフレンドのマヤが迎えに来てくれた。スーツケースを転がして外に出ると、涼しい風が吹きつけた。四月は毎年気候が不安定だそうで、私の滞在した期間中は非常に寒く、雪や雹も降った。クリストフとマヤの住んでいるノイケルンのアパートに二週間泊めてもらった。ノイケルンはトルコ人居住者がベルリン中で最も多い地域で、中にはドイツ語を喋らない人もいるという。移民や若いアーティストや何代も前からの地元民が共存しており、大通り沿いにはトルコ料理レストランやトルコ食材のスーパーが派手に軒を連ねているが、一歩路地裏へ入ると、数百年前のボヘミア移民の住んだ家屋がそのまま残る通りや、十七世紀の教育学者コメニウスの業績を称えた、緑溢れる公園がある。その周囲には若者に人気のマクロビオティック・カフェや無農薬食材のアイスクリーム屋も点在している。石畳の通りを何ブロックか歩いて、クリストフの友人の経営する中古レコード屋に行くと、髪を赤や真っ黒に染めた若者たちが破れたソファに腰掛けて一心にレコードを聴いていた。店先のガラス窓に、中原さんと私の小説のイラストをコラージュした、朗読会のポスターを貼ってくれていた。

「多様性」「同一性」「差異性」といった抽象概念も、パンク好きの青少年と移民が入り乱れるこんな街では、飲料水や毛布と同様の生活必需品なのかもしれなかった。地下鉄に乗れば、歌や楽器演奏で投げ銭を乞う人が現れる。犬を連れた乗車も許可されている。ベルリンの住民は全身黒っぽいストイックなファッションをして、差し出されるペットボトルにときどき小銭を入れながらも、他人のことは他人のこと、と素知らぬ顔で地下鉄に揺られている。

四月二十六日、日本学科の研究室でスピーチをした。ベルリン郊外のDahlem Dorfという駅で降りて林道を歩いていくと、吊り橋を渡った森の奥に巨大なキャンパスが建っている。日本文学研究者や学生や関係者の知人など、二三十人を前に、ときどき自分の演出した舞台作品の映像を流しながら、用意してきた原稿を読んだ。

大学生のとき「猫殺しマギー」を軽い気持ちで書いて、初めて自己表現らしきものができた気がしたこと。「俺」という一人称の語りを用いてすいすい書けたが、その後でどう書けばいいのか分からなくなったこと。日本語は歴史が長いようでいて、明治維新以降大きく改変されたという。西洋起源の翻訳語も数多く加えられた。どうもそれと関係ある気がするのだが、ちゃんと「私」を使って文章を書こうとすると「お行儀よくしてなさい」と監視されているみたいに体が強張る。以降も小説に挑戦したが楽しんで書けない。

二〇一一年、東日本大震災に動揺して、「人生でやり残したことがある気がする」と心許なくなり、芝居の演出と劇作を始めた。昨年上演したファスビンダーの戯曲「猫の首に血」は、言葉についての物語である。登場人物たちはラストシーンで、宇宙人の少女に首筋を噛まれて、人間の言葉を失う。その場面では俳優たちに肘や膝や頭を床に接触させ、足が何本もある虫みたいな生き物に変身してほしいと頼んだ。言葉とはその虫のようなもの、人間とは絶対に心通じ合えない他者で「異物」なのではないか。歴史の中で幾度もその姿を変えてきた日本語は、中国や西欧諸国、その他の文化とのハイブリッドとも言える複雑な代物だが、おそらく世界中どの言語だって、アイデンティティなんて曖昧な、得体の知れないもので、つねに居心地の悪さと隣り合わせのまま使い続けられてきたんじゃないか。

けれども、言葉も他者も不可知だからこそ、時に思いがけない驚きをもたらしてくれる。私も言葉のおかげ、「猫殺しマギー」やファスビンダーのおかげで、こうしてベルリンに来て皆さんと出会えたわけです。――なんてことを、たどたどしい英語で喋った。

終了後に、大学内のイタリアンレストランで食事をしながら出席者と話をした。中島敦の短編「文字禍」を最近ドイツ語に訳したという研究者ヨハンは、私のメモ帳にいきなり『狼疾記』の由来となった孟子の言葉を漢文で書きつけ、中島敦がパラオ南洋庁に赴任していたこと、カフカを日本で最初に翻訳した人物であることなどを流暢な日本語で話してくれた。通訳のティルは落語と漫才を愛しており、以前は日本の芸能事務所に入って芸人を目指していたが、笑いで食べて行くのは難しく断念。現在はアイルランドの大学で、日本学の教授をしているという。彼らに興味が尽きなかった。夜の七時を過ぎてもまだ外は明るく、窓から西日を受けて立つ教会の建物が見えた。

四月二十八日には、西ベルリン時代の中心地だったというシャルロッテンブルクの「ベルリン文学館」で「猫殺しマギー」の朗読をした。小説を人前で朗読するのは初めてだった。大学時代の夏休みに、パソコンを買ったついでに手遊びに書いた小説を、ベルリンの人々が清聴しており、スクリーンにはクリストフが作ったドイツ語字幕が流れている。詐欺師の気分だ。朗読後の質疑応答で自由大の学生に「なぜ主人公は女性のマギーという名前なのに、自分のことを男だと言うのですか」と質問された。

「マギーは男か女か、私にも分からないんです。彼は自分を『俺』と呼びます。ドイツ語で一人称は『イッヒ』だけですか？（学生さんうなずく）日本語は一人称の数が多いと言われますが、状況に合わせて使い分けられるのは男性だけです。公的に使える『私』のほかにマッチョなイメージの『俺』、良いとこのお坊ちゃんみたいな『僕』。それに対して女の一人称は『私』かせいぜい『あたし』だけで、退屈な気がしました。女の人にももっと使いやすい一人称があると楽しいのにね」

中原さんは「暗い廊下に鳴り響く、淋しい足音の歌」という初期の短編を朗読。途中「ずいぶん昔に書いたので自分の小説の漢字が読めません」と告白、会場を沸かせた。

打ち上げの居酒屋で、来場したベルリンの人々に好きな日本文学を聞いてみた。黒ずくめファッションの女性研究者ディナさんは、江戸川乱歩の「パノラマ島奇譚」や夢野久作の「ドグラ・マグラ」などが好きで、「アクタガワの『ジゴクヘン』は『ウジシューイモノガタリ』が元ですね」と詳しい。日本で文学好きの若い女性と話しているのと何ら変わらない。安部公房が好きだという若い研究者たちが、「日本の大正文学は希有な発展を遂げた。世界で一番面白い文学だと思う！」と言う。そりゃ好きで研究しているのだから当然だが、ここまで確信を持って愛を表明されると最早カルチャー・ショックという他なかった。

残りの日程で、主にベルリンの演劇を観ていた。フォルクスビューネで、ポーランドの若手演出家がレーモン・ルーセルの奇書「ロクス・ソルス」を70年代SF映画風の見世物小屋に翻案した野心作。ミッテのゾフィエンゼーレで、ニューヨークの振付家によるコンテンポラリーダンス。自分の劇団の旗揚げ公演に参加してくれた、ベルリン在住の日本人俳優の舞台。シャウビューネで演出家トーマス・オスターマイヤーによる現代的な演出の「リチャード三世」。それからベルリンドイツオペラで「椿姫」。日本の現代演劇との違いは、俳優と観客の距離が物理的にも心理的にも近いことだと思った。目を見張るほどの身体能力を有するパフォーマーたちが、人種も性別も入り乱れ、まるで懐かしい旧い友のように客の目をじっと見つめて近づいてくる。ベルリン演劇が良いと言われる理由が分かった。かっこつけてなくて、良いのだ。ちなみに五本中三本で俳優が全裸になっていた。日本の

舞台俳優は最近、全然脱がない。電車の中吊りにもコンビニにも、媚びた子供みたいな顔をした女たちの生白い水着やヌードが溢れているというのに。

帰国間際の夜には、クロイツベルク地区の地下のライブハウスに、クリストフと中原さんのライブを観に行った。クリストフはバーベキュー用の大きなフォークを使ってノイズを出す。大きな体で懸命に風船を膨らませながら、その表面にフォークの先を当てるとピョンピョンと変な音がして、そのうち風船が割れる。人柄そのままのユーモアと実験精神に溢れた演奏だった。このフォークでノイズを演奏する人は、金魚が巨大化し、地下鉄が泣き、男がオムライスとファックする「猫殺しマギー」の世界に共感してくれたのだ。日本じゃ全っ然売れなかった小説なのに、世界は何て広いんだ。

出発の日の朝、私と中原さんが荷物を運びながら「日本に帰りたくない。まだベルリンにいたい」と駄々をこねていたら、クリストフが言った。「羨ましい。あんな面白い国に君たちは今から行けるんだよ。ベルリンは飽きちゃった」。えーどこが良いの？　お洒落な食べ物SUSHI？　タニザキカワバタミシマ？　好きなノイズ音楽家がいるから？　あの商業主義に染まっちまった息苦しい島国。未だに女性が男性にお酒を注ぐのが当然の、ジェンダーギャップ先進国トップクラスの未開の土地よ。「そりゃ問題はたくさんあるだろうけど……とにかく好きなんだ。早くまた日本に行きたい！」。

空港でクリストフとマヤに別れを告げて飛行機に乗った。中原さんと機内で小学生のようにテトリスをして、再びアブダビ経由で帰国。降り立った成田空港はなんだか妙に清潔で空気は湿っており、風景がくぐもって見える。非現実的なMANGAの世界に来たみたい。

旅から数ヶ月、夏の盛りになっても、クリストフたちが「来月また来て！」とメールをくれる。またベルリンに行くだろう。彼らの目を通して、もっと母国を知りたい気持ちもある。私は普段日本語以外でものを考えることはないし、日本の歴史や文化の影響なしでは存在し得ない、いわば怪物だ。外から光を当ててもらわないと、自分の姿も分からない。また今回は物語を語る人間として旅をした。私の持論では、語る者のアイデンティティは、世界のあらゆる場所の空気や光や物の形、人や動物の表情の中に、無限に遍在しているのだと思う。曇りがちなベルリンの街が、雲間から光が射した途端に突然金色を帯びるあの瞬間、落書きだらけの建物や、川縁の芝生、街路樹や花などの色彩がすべて、強いコントラストで輝き出すときのことを思うと、国籍も性別も名前もなくなって自分が景色そのものであった気がしてくる。景色が主人公の小説を書いて、自分の身分証明書にするとしたら、一人称は何にすれば良いんだろう。私は千木良悠子で女性で日本人。でも言葉の世界に遊んでいるときは、他の何にでもなれるのかもしれなかった。

（了）